様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０２５２

研究課題名（和文）翻案映画におけるシェイクスピア受容のインターテクスチュアリティ

研究課題名（英文）Intertextual Receptions of Shakespeare in Film Adaptations

研究代表者
大島　久雄（Oshima, Hisao）

九州大学・芸術工学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：８０２０３７６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円、（間接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：　サイレント時代からシェイクスピア作品は貴重な映画の材源となっていたが，戦後、大衆娯楽として映画産業が隆盛を迎えるにつれて娯楽ジャンル映画形式を活かしたシェイクスピア翻案映画が活性化した。本研究は、シェイクスピア受容のインターテクスチュアリティ研究の観点から，シェイクスピア受容批評の構築と検証を目指し、地域性や時代性を反映しながら、西部劇・ギャング映画・ミュージカル映画・時代劇等の娯楽ジャンル映画の枠組みの中でシェイクスピアがいかに古典としての力を保ちながら娯楽作品として国際的に翻案されてきたかを映画アーカイブ資料を利用して黒澤明映画と『テンペスト』受容事例のケーススタディから明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　Shakespeare's plays have been an essential source material for film makings since the age of silent cinema. After World War II, many Shakespearean film adaptations appeared as genre films were much demanded as a form of popular entertainment. From the viewpoint of the intertextuality of Shakespearean reception, this study has attempted to experimentally construct the critical methodology to understand it, and has examined how Shakespeare's plays are internationally adapted into forms of entertainment film genres, such as westerns, gang films, musical films, period drama, and so on, without losing their original power of classics, mainly through the case studies on Akira Kurosawa's Shakespearean films and adaptational films and stages of "The Tempest" in Japan as well as in other parts of the world.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：シェイクスピア　翻案映画　受容　インターテクスチュアリティ　地域性　歴史性　黒澤明　テンペスト

１．研究開始当初の背景

(1) 近年、シェイクスピアの国際的受容に関心が高まり、ローカルなシェイクスピア受容事例に関する研究が注目を集めている。2006年7月オーストラリアのブリスベインで開催された "The WIII World Shakespeare Congress" では "Shakespeare's World, World Shakespeares" を中心テーマとしてシェイクスピアの多様な国際的な受容が議論され、文化的な差異を強調したユニークな受容事例を取り上げた個々の研究は盛んであるが、それらを総括し，国際的なシェイクスピア受容を総合的に理解するための批評理論や研究方法論の構築が緊急の課題となってきた。

⑵　シェイクスピア映画研究に関しても同様の状況が見られる。サイレント映画の時代からシェイクスピアは映画製作の重要な材源のひとつであり，第二次世界大戦後は、混乱の時代が沈静化するにつれて、映画が大衆娯楽の主要な一部となり、多様な娯楽映画ジャンルにおいてシェイクスピア翻案が製作された。これらの映画に関してもシェイクスピア映画史の中で取り上げられ、個々の作品分析は行なわれているが、シェイクスピア受容批評の観点から包括的に個々の作品を分析した研究はなかった。

２．研究の目的

⑴　そこで本研究は、インターテクスチュアリティに注目したシェイクスピア受容研究の立場から主として日米のシェイクスピア翻案映画を取り上げて、西部劇・ギャング映画・ミュージカル映画・時代劇等の娯楽映画ジャンルの枠組みの中で地域性や歴史性を反映しながらシェイクスピアがいかに翻案映画化されているかを解明することを試みた。特に日本においてシェイクスピア翻案映画の傑作を生み出した黒澤明作品におけるシェイクスピア受容の映画的手法について明らかにすることを目指した。

⑵　映画と舞台は相互に影響してきたので、翻案映画が舞台上演に及ぼす影響に関しても研究対象とした。特にジャンル映画的な翻案技法が舞台作品にも影響する例として『マクベス』と『テンペスト』の上演事例を調査・分析し、翻案映画作品と比較しながら、日本における両劇作品受容についての事例研究を行い、そのインターテクスチュアリティを分析した。このような映画や舞台上演に見られる翻案様式は、明治期より日本において一種の伝統を形成しているので、特に従来の演劇伝統を肯定・批判しながら展開して来た日本のシェイクスピア受容の伝統も視野に入れて研究を行った。

⑶　このような翻案映画・翻案上演事例研究や日本におけるシェイクスピア受容伝統の形態論的研究を実施することにより、インターテクスチュアリティ受容批評理論・研究方法論を構築し、事例研究の中で実践的に検証しながら、国際的なシェイクスピア受容の理解の鍵となる批評理念・方法を精査し，抽出することを目指した。

３．研究の方法

(1)　国内外における関連研究資料・映像アーカイブ調査によって研究資料の発掘・収集を行ない、インターテクスチュアリティ受容批評の観点から分析を行なった。日本芸術文化振興会伝統芸能情報館、早稲田大学演劇博物館、ブリティッシュ・フィルム・インスティテュート、シェイクスピア・インスティテュート、フォルジャー・シェイクスピア・ライブラリー、ニューヨーク公立図書館等における資料収集、佐渡島能舞台調査、北九州芸術劇場、世田谷パブリック・シアター、新国立劇場、新潟パフォーミング・アーツ・センター、ポルトガル国立劇場(リスボン)，ニュー・グローブ座(ロンドン)等における観劇調査も本研究の重要な一部である。

(2)　翻案される映画のジャンル形式や舞台演出により原作がいかなる変更を加えられているのか、また翻案が地域性や歴史性をいかに反映しているかに注目して事例分析を行なった。背景となる歴史的・文化的言説がいかに原作に織り込まれて翻案が形成されているかを演劇的な図像学的手法を使用して綿密に解析した。特に黒澤明監督シェイクスピア映画『蜘蛛巣城』と『乱』とそれに関連する他のシェイクスピア映画作品，『テンペスト』映画・舞台上演事例に関しては綿密に映像アーカイブ調査と資料収集を行ない，緻密な演出・シナリオ・映像分析を行なった。

(3)　これらの事例分析に実践的に応用しながらインターテクスチュアリティ受容研究方法論・批評理論を構築し、事例研究によって検証，再構築して行った。特に映画ジャンル形式や演劇様式，地域性や歴史性が翻案に及ぼすインターテクスチュアルな作用とテキスト・言説間のノード(接点)の重要性に注目して理論的な考察を行なった。

４．研究成果

(1)　戦後の混乱期が沈静化して大衆的な娯楽媒体として映画が隆盛期を迎えるにつれて，シェイクスピア翻案映画の製作が活性化する。西部劇・ギャング映画・ミュージカル映画・時代劇などの娯楽ジャンル映画形式にシェイクスピアの古典的ドラマを盛り込んで、これらの翻案映画は，地域性や時代性を反映させ、シェイクスピアを同時代的にアレ

ンジした。

(2)　このようなシェイクスピア受容方法は，ジョン・フォード監督を映画の神様として崇拝する黒澤明により日本においても映画に応用され、『蜘蛛巣城』や『乱』を生み出すが、シェイクスピアを日本の伝統文化や歴史と結びつけて翻案映画化する黒澤の手法は，明治時代にまずは歌舞伎等の伝統芸能の演劇様式の中でシェイクスピアを取り入れようとした演劇改良の動きにまで遡ることができる。このような新劇を生み出す明治の欧化政策に端を発するシェイクスピア受容の伝統の中に黒澤やそれに続く日本的シェイクスピア演出家の試みは位置づけることができる。

(3)　黒澤明が世界に示したシェイクスピア翻案様式は、現在では世界的に一般化し、ローカルなシェイクスピア映画・上演事例が世界的に注目されているが，黒澤の手法は，視覚的な舞台表象を重視する蜷川幸雄に受け継がれて、ユニークな日本的なシェイクスピア上演事例を生み出した。特に日本における『テンペスト』受容に注目し、事例分析から伝統芸能・文化，歴史性，地域性がユニークな受容の背景にあることを明らかにした。

(4)　インターテクスチュアリティ受容研究方法・批評理論の構築・検証の点に関しては、演劇伝統やジャンル的様式とともに地域性・歴史性が重要な役割を果たすことと、異なるテキスト・言説を結びつけるノード(接点)が重要であることを明らかにし，2014 年度日本演劇学会全国大会(摂南大学，6 月 14 日)にての研究発表が決定している。

(5)　国際学会に参加することによりシェイクスピアの国際的な受容に関する理解を深め、そのような理解を基に日本におけるシェイクスピア受容に関して国際学会で研究発表を行なったことは，本研究の大きな成果である。これにより日本におけるシェイクスピア受容に関して国際的に発信することに貢献できたし、世界的な研究水準から本研究の価値を見直すキッカケにも繋がった。特に東日本大震災後の日本におけるシェイクスピア上演についてはこれまでに類のない研究を同じく震災に見舞われたポルトガルにて発表することができた。さらにアジアにおけるシェイクスピア受容研究の活性化により 2014 年 5 月に Asian Shakespeare Association が結成され、その第１回大会が台湾で開催されたが，これにも参加し，日本のシェイクスピア受容に関して研究発表を行なった。

(6)　研究成果の社会的な還元としては、九州大学公開講座として「映画で楽しむシェイクスピア」(2012年9～10月木曜日90分5回)，「舞台で楽しむシェイクスピア」(2013 年 9 月木曜日 90 分 4 回)を実施し，一般市民の受講者に好評であった。今年度に関しても「黒澤明のシェイクスピア映画」(2014 年 9 月木曜日 90 分 4 回)が決定していて、これも本研究の研究成果を盛り込んで実施することを予定している。

(7)　日本における『テンペスト』受容のインターテクスチュアリティに関しては、ドイツを拠点とする国際的な英米・文学研究専門書出版社 Narr Verlag よりシェイクスピア国際会議発表論文が採択されて，共著書として出版された。本研究において追求して来たインターテクスチュアリティ受容研究方法論・批評理論を適応した日本における『テンペスト』受容研究であり，地域性や歴史性を活かし，伝統芸能と密接に関連してきた『テンペスト』受容事例を取り上げて、日本的なシェイクスピア受容の伝統を具体的に検証した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　6　件）
(1) Hisao Oshima, “Japanese Stage Representations of Travels in Shakespeare’s Plays in the Romance Tradition” (The Inaugural Conference of the Asian Shakespeare Association: National Taiwan Univ., 17 May 2014).
(2) Hisao Oshima, “The After-War Psychological Intertextuality of Akira Kurosawa’s *Throne of Blood*” (The 30th International Conference on Psychology and the Arts: Univ. of Porto, 29 June 2013).
(3) Hisao Oshima, “The Influence of the Audience’s Psychological Change after the Tsunami on the Intertextual Reception of Shakespeare in Japan” (The 29th International Conference on Psychology and the Arts: Univ. of Ghent, 4 June 2012).
(4) Hisao Oshima, “Shipwrecks in the Kabuki Style: *The Tempest* in Japan” (International Conference “‘Dash’d All to Pieces’: Tempests and other Natural Disasters in the Literary Imagination” (Univ. of Porto, 2 December 2011).
(5) Hisao Oshima, “The Intertextual Reception of *The Tempest* in Japan” (The Nineth World Shakespeare Congress: Prague, 20 July 2011).
(6) 大島久雄,「戦後ジャンル映画におけるシェイクスピア受容のインターテクスチュアリティ～『荒野の決闘』から『悪い奴ほどよく眠る』まで～」(第 49 回シェイクスピア学

会: 福岡女学院大学, 2010 年 10 月 16 日).

〔図書〕（計　1　件）
(1) Hisao Oshima, and others, *Yearbook of Research in English and American Literature, Vol. 29: Critical and Cultural Transformations: Shakespeare's "The Tempest" – 1611 to the Present*, ed. by Tobias Doering and Virginia Mason Vaughan (Narr Verlag, 2013). [分担箇所: "The Tempest and Japanese Theatrical Traditions: Noh, Kabuki and Bunraku," pp. 149-172]

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大島　久雄　（OSHIMA, Hisao）
九州大学・大学院芸術工学研究院・准教授
研究者番号：80203769

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし